

富良野市における調査結果の概要

～全国・全道との比較における考察～

平成25年12月 富良野市学力向上推進プロジェクト

《調査概要》

◆調査目的

- ◇全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ◇教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- ◇学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

◆調査対象

小学校第6学年、中学校第3学年

◆調査内容

- ①教科に関する調査（国語、算数・数学）
 - ・主として「知識」に関する問題
 - ・主として「活用」に関する問題
- ②生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査
 - ・児童生徒に対する調査
 - ・学校に対する調査

《調査結果》

◆教科に関する調査（国語、算数・数学）

【小学校】

算数の「活用」に関する問題は、全道平均正答率を上回っており、算数の「知識」に関する問題は、全道平均正答率と同等である。

【中学校】

国語・数学の「知識」に関する問題は、全道平均正答率を上回っており、全国平均正答率と同等である。国語・数学の「活用」に関する問題は、全国・全道平均正答率と同等である。

◆生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

【学校質問紙】

- ◇朝読書や放課後を利用した補足的な学習サポートを実施している割合が高い。
- ◇地域との連携や外部講師を活用している割合が高い。
- ◇教職員が実践的な研修を行ったり、校内外での研修に参加している割合が高い。

【児童生徒質問紙】

- ◇きまりや約束を守っている割合が高い。
- ◇いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思っている割合が高い。
- ◇人の役に立ちたいと思っている割合が高い。

- ◇自分の考えを発表する機会や話し合う活動を行なっている割合が高い。
- ◇読書を好きな割合が高い。
- ◇国語や算数・数学の勉強が大切で、将来社会に出たとき役に立つと思っている割合が高い。

《調査結果に基づく考察》

◆小学校

- ◇教科に関する調査では、算数の「知識」に関する問題は、全道平均正答率と同等であり、算数の「活用」に関する問題は、全道平均正答率を上回っている。国語については「知識」に関する問題は「活用」より高い正答率になっている。引き続き、基礎・基本の確実な習得を図ってまいります。

◆中学校

- ◇教科に関する調査では、「知識」に関する問題は、全道平均正答率を上回り全国平均正答率と同等である。「活用」に関する問題は、全国・全道平均正答率と同等にある。基礎・基本が確実に習得された結果といえる。
- ◇平成22年度の調査（中学校3年生が小学校6年時に実施）の結果と比較すると、「活用」に関する問題も、全道正答率との差が少なくなっており、小学校から中学校へ円滑な接続が行われ、中学校における指導方法を改善・充実させながら、「知識」「活用」分野の学習指導に努めてきた結果といえる。

◆小学校・中学校共通

- ◇小学校・中学校共に算数・数学では、「知識」及び「活用」に関する問題において、全道平均正答率を上回っているものもあれば、同等のものもある。このことは、児童・生徒の理解の程度に応じたきめ細やかな指導が行われきた成果と評価している。

この調査結果を踏まえ、学力向上に向けた取り組みを、『第2次富良野市学校教育中期計画（平成25年度～平成29年度）』及び『富良野市ZERO運動』を基軸とし、充実した教育活動が展開できるよう推進していきます。

『第2次富良野市学校教育中期計画（平成25年度～平成29年度）』

学校教育中期計画（平成20年度～平成24年度）は、「自立と共生の未来を拓く、心豊かでたくましい人を育む」ことを基本理念に掲げ、策定された計画です。この間の成果と課題を土台とし、子どもたちが変化の激しい時代をたくましく生き抜き、自らの未来や社会を拓く「生きる力」をオール富良野で育てていくため、第2次学校教育中期計画（平成25年度～平成29年度）を策定しました。

『富良野市ZERO運動』

ZERO「0」は、教育の原点であり、和（輪）を表わす「学び」を支える象徴として捉えることができます。「ZERO運動」は、各学校や教職員等が、教育の原点を見つめ直し、主体性や向上性を基軸として教育実践の輪を広げていくことを意味しています。

～すべては子どもたちのために～

行政、学校、家庭、地域社会が連携し、
確かな学力向上に努めます。

■教育委員会

- 学校、家庭、地域が一体となって取り組める体制づくりを推進します。
- 継続的な外部講師等の協力を得て学校教育を推進します。

■学校

- 現状把握と明確な目標を設定し、学校全体が1つの課題に取り組む体制づくりに努めます。
- 児童生徒の学ぶ意欲及び関心の向上を図り、学習の悩みゼロに努めます。
- 基礎・基本の確実な定着を図るため、学校の指導体制及び指導方法の工夫改善を図ります。
- 児童生徒が発表する場面や体験活動等を充実し、活用する力を育てます。
- 家庭や関係機関等と連携し、個に応じた特別支援教育の充実を図ります。
- 学校間・校種間の連携と円滑な接続に努めます。
- 家庭学習の定着化に向け、宿題の出し方等の工夫改善を図ります。

■家庭

- 『家族の約束7カ条』を推進しましょう。
- 日常生活での積極的なコミュニケーションに努めましょう。
- 規則正しい生活習慣と計画的な家庭学習（予習・復習など）に小学校第6学年では毎日70分以上、中学校第3学年では毎日100分以上取り組みましょう。
- 「早寝・早起き・朝ごはん、みんなそろって晩ごはん」を実践しましょう。
- 「ほめて、伸ばす」家庭教育に取り組みましょう。

■地域

- 積極的に子どもたちと触れ合いましょう。
- 学校の応援団として、学校支援ボランティアへ登録しましょう。
- 学校の授業公開へ積極的に参加しましょう。

富良野市学力向上推進プロジェクト

（富良野市PTA連合会・富良野市校長会・富良野市教育委員会）

家族の約束 7か条

「すべては子ども達のために」を合言葉に

1. 学習や生活習慣である「早寝・早起き・朝ごはん・みんなそろって晩ごはん」運動に取り組みましょう。
2. NOテレビ・NOゲーム・NOインターネットの日を設けて家族で読書に親しみ「絆」を深めましょう。
3. 学校行事やPTA活動に積極的に参加しましょう。
4. 子どもの危険信号（SOS）に早く気づき心配事は39-2333番（教育相談直通電話）へ電話しましょう。
5. 携帯電話・インターネットなどのネット被害から子ども達を守るため「家族のルール」本を基本に家族の「絆」を深めましょう。
6. 授業参観や家庭教育（子育て）セミナー、講演会に積極的に参加しましょう。
7. 子育て家庭教育ハンドブックを活用し家族の「絆」を一層深めましょう。

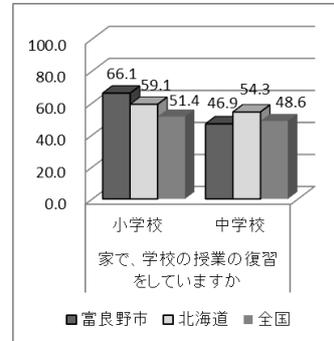
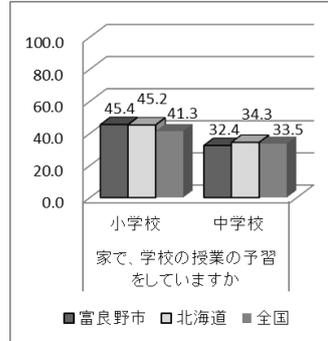
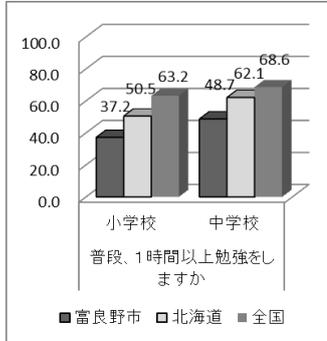
富良野市PTA連合会

富良野市教育委員会

《資料2》 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査（抜粋）

【児童生徒質問紙】

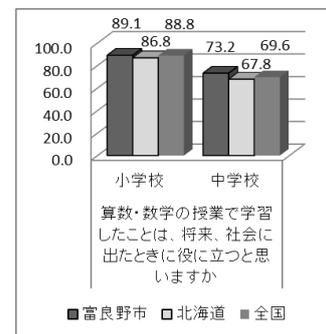
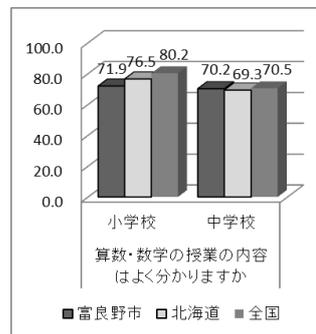
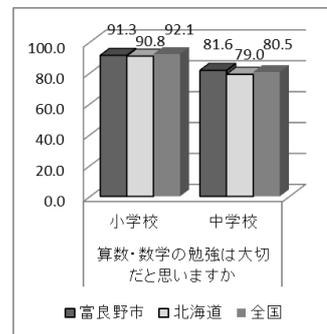
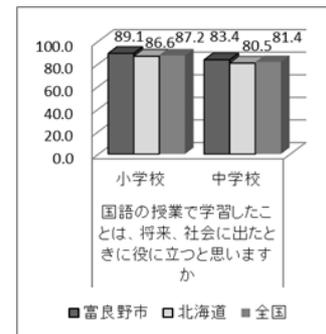
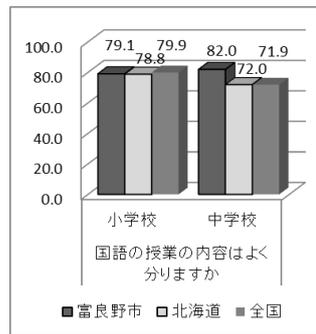
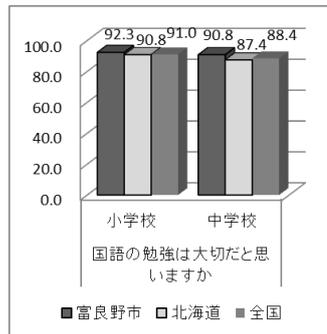
○学習習慣について



本市児童・生徒は、家庭で1時間以上勉強している割合が全国・全道と比べて小6年・中3年ともに低い状態が見られる。

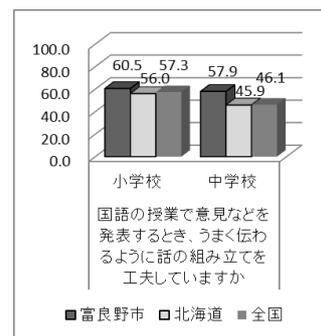
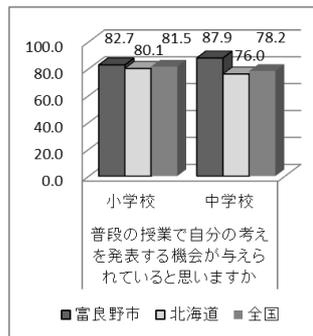
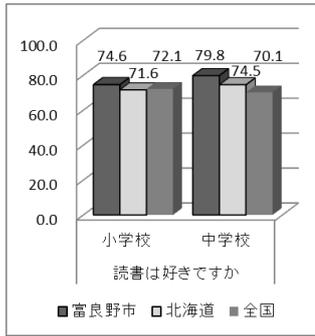
家庭で過ごす時間の多くをゲーム等に当てる割合が高く、予習・復習の時間が全道と比べても低いことから、家庭での学習時間の確保が課題となる。

○学習（国語、算数・数学）について



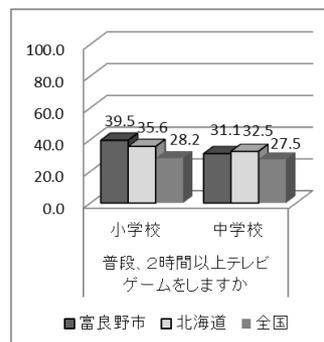
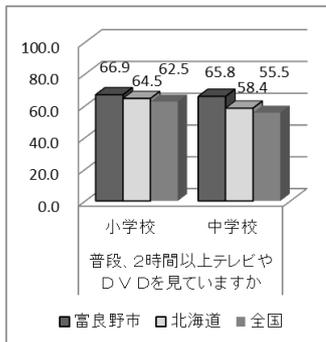
国語、算数・数学の勉強を大切だと考える児童生徒の割合が高い。また、「授業の内容がよく分る」と回答している割合が中学校の国語で顕著に高い。これまで、各校での授業公開を推進してきたことや、教職員の授業研究の充実が図られていることの成果が着実にあらわれてきている。

○読書・発表の仕方について



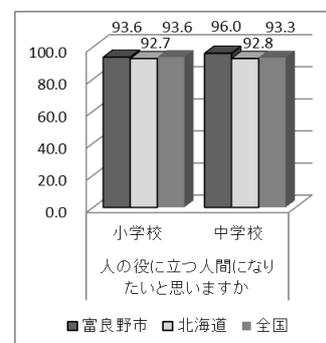
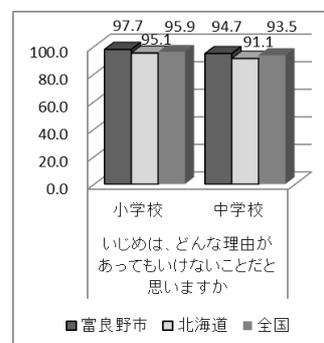
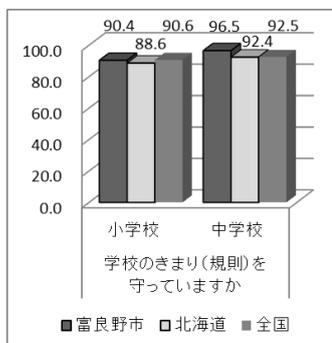
市立図書館・富良野小・扇山小が連続して学校支援ボランティアによる活動やPTA活動等で文部科学大臣賞を受賞したことにもあるように、本市での読書活動推進の取組の成果が児童生徒の回答に現れている。また、演劇教育・少年の主張・子ども未来づくりフォーラム・新聞コンクール等の取組を通して、筋道立てて話すことや自分の思いを他者に伝えるように表現する活動への地道な取組の成果がこの数値となっていると受け止めている。

○家庭でテレビやゲームにあてる時間について



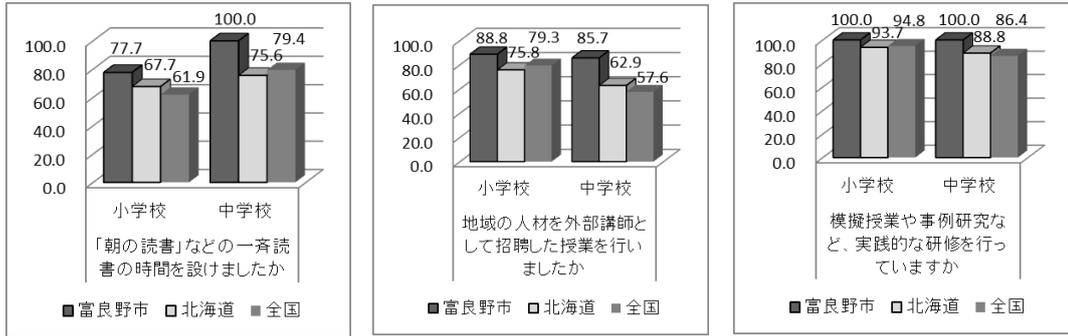
家で、テレビを2時間以上見ている割合が全国・全道と比べてもかなり高い。ゲームをしている時間も、長いことから、当然のことながら、家庭学習に充てる時間が少なくなってくる。家庭での過ごし方について、改めて児童のみならず保護者にも啓発をしていく必要があると考える。

○児童・生徒の規範意識について



「ZERO運動」、「人権運動」、「あいさつ運動」など、学校での日常的な取組の成果が児童生徒の回答に現れている。

【学校質問紙】



○総合考察

総じて本市児童生徒は、学習への意欲が高く、授業に対しても「わかりやすい」と回答している割合が高い。また、読書習慣の定着や「少年の主張」や「子ども未来づくりフォーラム」「演劇」等、発表の機会も多い。このような、学びの環境整備が整っているが、学力テストの結果に取組の成果が一部の学校で結びついていない面が見られる。家庭学習の時間が全国・全道平均と比べても短いことから、授業の予習・復習を含めた家庭での勉強時間を増やすことが授業内容の定着に直結する。また、学校での在校時間の中で、全校で児童生徒の基礎的な学力をつけていく時間を設定するなどの工夫が必要である。

《資料3》 中学校3年生（平成25年度）の小学校6年時（平成22年度）との比較
生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査（抜粋）

